

動物・人・神々

オッセンドフスキ著
神近市子譯四六判三二五頁 昭和十五年十二月
生活社發行 價一圓八十錢

僕はこゝで此の本を紹介したり又は批評したりするつもりではない。嘗て問題になつたこの本が今度續譯されたとして、讀めば面白い本なんだから、決して抗議を申込む様な筋合のあるものでもない。たゞ譯者が「飽くまで眞摯な人が異常な時期に異常な環境において遭遇した事實の記録」だとして、早く問題になつた事を知らないかの様に見えるので、少し論争のあつた事を紹介して置くがよくはないかと思ふに過ぎない。實は以前に衛藤利夫さんの「韃靼」と題する本が出た時に、その本の中にオッセンドフスキの他の著「アジアに於ける人間と神祕」から二三章抜いて譯してあつたので、僕は「オッセンドフスキ」と題する小篇を書いて龍谷大學學藝部で出してゐた「宗教と藝術」誌第十八卷第二・三號に掲げてこの論争を紹介したのであつた。然し「宗教と藝術誌」はさう廣く行はれてゐない雑誌な

のであるから、もう一度簡単に注意をしてもよからうかと思ふ。

僕は何もオッセンドフスキの事をよく知つてゐるでもない。又かの論争を詳しくも知つてはゐない。然し後のこの問題を調べて見ようと云ふ人の爲めに、自分の知つてゐるものの名は便宜上ここに煩さいが擧げて置かうと思ふ。

本書は最初英文で發表されたもので、随分よく賣れたものらしい。英文の本も一種ではなかつた様に思はれる。兎に角よく賣れたので、佛譯本や獨譯本や露譯本も出る様になつた。其他の譯本もあるかも知れない。佛譯は初め *Revue hebdomadaire* に掲載されたものらしい。それは *Charté* No 60 (3^e année), 1^{er} Juin 1924. の *Album: Les Revues*. の中に批評されてゐるからである。それから直ちに單行出版された。Bâtes *Hommes et Dieux*, par Fernand Ossendowski, avec une introduction de Lewis Stanton Palen, traduit de l'anglais par Robert Renard, 275 pages et une carte. Plon-Nourit, Paris, 1924, がそれである。獨譯本は少し前に出たらしい。Tiere, Menschen und Götter, illustriert, mit z. T. farbigen Bildtafeln nach Aquarellskizzen und Originalaufnahmen des Verfassers. 369 Seiten mit einer Karte. Frankfurter Societäts-Druckerei G. M. B. H. Abteilung Buchverlag, Frankfurt A. M. 1924. 然し僕は見てゐない。露譯本は *Zveri, ljudi, Bogi, Ferdinand Ostendovskago*. Knigoizdatel'stvo G. L. Birkgan, Riga, 1925. である。巻頭には著者の序だけしかない。英文本がよく賣れたので、其の機を失せず佛獨兩本をも出したが、何分にも問題が

起つたので著者の言ひ譯めいた序文だけにして露文本を出したものでらしい。

問題が起つたのはクルルテ誌上に於てである。第六十號のアルトマンの短い批評もこの直系人の著には好感を既に持つてゐないが、第六十五號に至つてはドクトル・モンタンドンが「詐欺師か幻想家か」(Dr. George Montandon: Imposteur ou Halluciné?)と題する手厳しい批評を掲げたのである。その旅行の里程が不合理で信する事は出来ない事を主として論じ、又英佛兩本里程の異同のある事も指摘してゐる。終りには、専門家のみ知つてゐるスエーデン・ヘデンやサズビ・ランダアの著も嘗ては地理學協會から不合格を宣言せられた事もあるが、それは何も通過しなかつた土地を書いたと云ふのではない。途方もない冒險を記録したからなんだが、佛教聖地地方へ這入ると幻想で變になるんか知らんと迄コキ下ろしたものである。かうなると神近さんの讃辭はどうなるだらう。

このモンタンドンの批評に引續いてスエーデン・ヘデン博士及びウンドリング教授も別々にオッセンドフスキを攻撃してにせ旅行記だと云つたらしい。佛譯者ルナアルは周章でクルルテ社に辯解文を送るし、オッセンドフスキの英文著作協力者であり又彼の經歷の紹介者たるバンメンは *Les nouvelles littéraires*, Troisième Année No 109 (15 Novembre 1924) に反駁文を掲げるし、其他諸方にいろいろ反響が起つたらしい。ヌウエル・リテレル紙などは大に之を問題化して喜んだ。La Polémique Ossendowski et Montandon. と題せる一欄を設けて諸權威にも批評を請うたものである。第百十二號なんかには地理學の大家

サンティヴ G. Saint-Yves の返書が出てゐる。この書は旅行地理學者の著ではないとか、未知の國土を舞臺とせる文學作品なりとか、受けが悪い。「マウゼル・リテレル」社は一方オツセンドフスキとモンタンドンとの對質會見を計劃して十一月二十二日に同社で有名な文人連立會で兩人會見した。この會見の記事が見られると面白いだらうが未見である。會見の結果は覺書の發表となつたが、それは兩人の面子を立てた生温るいもので面白くもないが、モンタンドンは西蔵入りは承知しなかつた。そこで猛然と再び「クラルテ」誌第六十九號に Dr. Montandon: 「オツセンドフスキは無恥の虛言家なり」(Osendowski, le menteur sans honneur.) を掲げて、彼はウツツキでインチキ師なり、彼とバレンは共謀して金儲けの爲めにその書を作れり、故意に事實及び實話を誇張せり、通過せざる旅程を偽作せり、決して入藏せず、などとキメつけて、終に彼の著は三文駄小説に外ならずと斷言したのであつた。この「クラルテ」の文の初めにはこの問題の經過も同人の手で出てゐるので極めて參考になる。

僕の知つてゐるのは此處迄で後がどうなつたか知らない。所で以上の文獻だけで見るとどうもオツセンドフスキは怪しい。何しろ彼の旅行記は面白すぎる。事實の骨子はあつたんだらうとしても少しく奇怪なるは免れない。モンタンドンの様に里程時日の不合理をホデクリ出さなくても讀んだだけでも誰もホントカナ位の事は感じるに相違ない。それにバレンの反駁文に著作の動機や經過が書いてあるが、曖昧模糊たるを免れない。殊にオツセンドフスキ自身が「私の本はロマンで學會に提出する

事は決して許されない」だの、「余の著は人生記録なり、たゞ是れのみ」だの、「余は假令蒙古西藏を旅行した事がなくとも、かゝるものは書き得る」だの、妙な言葉を云つてゐるのでは辯解にも反駁にもならない。益々疑惑を深くするのみである。「クラルテ」連中は赤がゝつてゐるから、自系の彼かソ聯の惡口を云ふのが癢にさわつて、特に刺激的な文句を使つて問題化して了つたものと見える。彼にしても多少東洋を旅行して智識があつたんで、全然ウソばかり書いたものでなからうが、何として本書は神近さんの云ふ様な嚴肅な事實の記録ではない。本人が云ふ通りロマンである。冒險小説、怪奇小説である。文學者神近さんの云ふ如く「文學的にこれを鑑賞しても甚だ立派な作品」であるならそれでよいのである。正規の研究とか調査を努めないで文學作品として翻譯せられたらよいのである。本書には姉妹篇とも云ふべきものがあるのだから、又それを翻譯せられるならばと思つてこゝに冗長な筆をとつたのである。要するに本書は讀むと面白い本である。衛藤さんの様に食後の雜誌代りに讀むのが一番いゝと僕は信じてゐる。

以上の様な新刊批評を書いて見たが其儘に篋底にはりこんであつた處、この本は面白いと見えてよく賣れたか改裝版が店頭に現れたりしてゐるのを見掛けるに至つたし、又豫期してゐた姉妹篇の翻譯も同じ生活社から出版された。即ち大久保忠利氏譯の「アジアの人と神祕」がそれである。この「譯者まへがき」を讀むと大久保氏も神近さんと同じやうに、科學者で行動家で第一流の作家で、「この様に三様の特質を一身に兼ね、それ

に加へて恐れを知らぬ探検家の不逞な魂を備へた人間の紀行であるなら、何處の地方へ歩を運ぶとも讀むもの興を惹かぬ理由はない」とか「それは一人の著名な、卓絶せる人間の身をもつてのアジア紀行であると同時に、極めて廣い幅と厚味とを持つた人生の書でもある」とか賞め稱へて、「當今世界の注視が一齊にアジア内部に集中されつゝある際、各國各方面のアジア研究家が先づ以て氏の紀行に目を通すことを忘れない所以も此處にある」とまで云つてゐる。「詐欺師」とか「虚言家」とか批評されたことは御存知ないのである。各國各方面のアジア研究家が先づ以て讀むかどうかは僕の知る處ではない。

神近さんも大久保氏も譯出に就いては飯島正氏から原著を借りて居られる様だから、飯島氏はどう思つて居られるか知りたくなつてきた。そこで同氏著の「東洋のこゝろ」を讀んでみた。その中の「ウンゲルン・シテルンベルグのこと」の章にオッセンドフスキの著に觸れて、「この書物は小説ではない」とある。著者自身がロマンであると云ふものを飯島氏は小説でないと云ふのは「クラルテ」や「ヌウゼル・リテレメル」での論争を御承知ないからに相違はない。ウンゲルン將軍との關係に就いても何かモンタンドン先生は云つてゐた様だから、「クラルテ」は見られるがよいと思ふ。

オッセンドフスキは科學者で礦物に關する調査報告がある様にパレンの小傳に見えてゐる。僕は礦物學なんか何も知らないものであるから調べやうもない。偶々ソ聯アカデミヤが第三回汎太平洋會議に提出した Academy of Sciences of the U.S.S.R.: The Pacific, Russian Scientific Investigations. Leningrad,

1926. を見るを得たので、それと思はれる處を探して見たが、彼の名は出てゐなかつた。所が、其後偶然極東地質委員會編の報告 (Useful Minerals of the Russian Far East Editor P. T. Polevoy. Vvedivostok, 1923. [in Russian]. Records of the Geological Committee of the Russian Far East. No. 27.) を見るを得たから探して見ると A. M. Ossendorky と云ふ人が出てゐて、石炭に關する調査研究の報告が四つ程擧げてあつた。然しこの人の名は A、M、とあるからフルゲナンドとは別人だらう。まさかソ聯脱出後名だけ變へたのでもなからう。或は兄弟親戚かも知れないが、それにしてもパレンの傳は信じにくい。悪く想像するといろいろに考へられるがさう云ふ必要もなからう。

兎に角面白い本は翻譯して貰つて結構な事に違ひないから感謝に値ひする。然し問題の人の問題の書であるから、神近さんや大久保さんの様に最高の讃辭を巻頭に掲げたり、廣告の推薦の辭に答見恒夫氏の様に「この二十世紀にこの様な事實が起るだらうか、しかし、これは事實の報告である」などと四角四面になるのはどうかと思ふ。山内義雄氏の「現代最高の奇書と思ふ」とか、阿部眞之助氏の「大人の爲めにぜひ與へられるべきものだ」位の處にして置いて貰ひたい。後の我國の若いアジア研究家を誤つてはならないからである。それから餘りにも面白いアジア旅行記の翻譯にはよく注意して貰ひたい。どうやらそんなものもまだある様だからである。

〔石濱純太郎〕